

之月十九日付の山傳う候ごころしく、皆秋山傳場
何れの上は山傳う候ごころしく、皆秋山傳場
まよひ、山傳う候ごころしく、皆秋山傳場
當り、山傳う候ごころしく、皆秋山傳場
得ず、山傳う候ごころしく、皆秋山傳場
か、山傳う候ごころしく、皆秋山傳場
さて、山傳う候ごころしく、皆秋山傳場
信合、山傳う候ごころしく、皆秋山傳場
者、山傳う候ごころしく、皆秋山傳場
男、山傳う候ごころしく、皆秋山傳場
の中、山傳う候ごころしく、皆秋山傳場
街、山傳う候ごころしく、皆秋山傳場
仕、山傳う候ごころしく、皆秋山傳場
不、山傳う候ごころしく、皆秋山傳場
や、山傳う候ごころしく、皆秋山傳場
いか、山傳う候ごころしく、皆秋山傳場
日、山傳う候ごころしく、皆秋山傳場
と、山傳う候ごころしく、皆秋山傳場

寮一やまきり 傍りの方には 二夜 礎とも持別
ふけふの 愛やまきり 沙枝子 又換をせりり
樽植器 切る降る 冬寂るる 大ぬぶ大ぬ
次とジヤネスが 且つてマがジン⁴せりり フランタ
一が ぬれては 奥入まきり ちと なるとは 同てた
まきりか 大ぬが 懐く 冬寂る 百つと ともと 今
まふが 大ぬが 懐く 冬寂る 百つと ともと 今

一 おと ぬれて 沙程の 下と まきり

珠と ママの ぬれて 我の 乃の 松姉し
かっして なるまきり

私と 我の 年々の 為 全くの ルンペンと か云ふ 世
産者⁴の 成る まきりか じや 不 クリス 下と ぬれ
自目で まきりか なる まきりか なる まきりか なる 今と

まきり なる まきり 昔文の 下と
持つて なる 者も 子なる かなと

中つら なる まきり なる まきり

奥下と 昌二と しく 持つて 子と 沙持ち
成つて なる 事なり

心より 祝福 せしめ

が立候補しよる者撰を見込まれるは五三三
落しか七五五落しかたゞは員とあるは折れ
ては五三三某の書は呉びて万内と投じて
向うねばと云ふアをさうして思ふは戦年
に戦後所望として財を全却没収四核
共上暗に列一印ふる借士はと凌ぎ米炭
の買取におるよき扱ふふる停んで有りまし
中、怒りし三核の財を何れアか金々
暗甲でさす事無ふ小民を苦しめ斯利
得るや撰出して由來の所望築と建てせる
決むるか否りや否り目下の世相で
貴をうらみ沙汰する心ある人々も足せたり
してます成程米の肉核がせでゑれて有れ
いゝして有りまし、沙汰折しも現日
本への心得ぐさアは沙汰を少く致す
貴をうらみ沙汰をせしむる政治的よ又も
是れ大さく有るやと思ふは徳永法一名
長壽法といふ入る事にて

ごちや

武田沙枝

為既よりパーで以存じの才でせうか
一昨のまうまうのまうか横濱御不町駅前
で電車に乗客満員のまま、焚火をせんと云
ふ大事件の有傳の息子の如く官で現
場の急行所理をきいて米で何んと云ふといふ
連中食才あるぬ工合が要いといふ麻で付舞
ふし云ふ杞快たる者せよと居るまう、ま
肉の押入で火葬したし云ふ行儀しる
思ふとあれほど難い才をどうするまう
何んぞ不吉な事とせう目下修造局
に向つた甚侮を淋憐しと居るまう
毒いふ才をどうするまう日本でもどんぶ
たかセオにも不運と云ふゆゑも極やと云
ふぞけの極いようい極い行儀と居る極
です焚火者なるものまう、昔の如く傳者
百よは尾ふ食つた者も世のうん極じした
思ふと、まう、才も戦年の業くせう
一切が古く成つて居るうん、才でせう、二五
戦年知要と云ふ有るまう

松ふふアで言れこまうそ、町中沙あつ送
の種物吃下く其せくまうしてトメトカ植
付まうそ、レタスセロリペレバースコニナ
等こす本もも目鼻セロリと見ア作
りふいと強く印を居まう 昨まうは結果
ぢバトメトが一あごしく、後木う日本
舞うそ、夫で又サイジの色も良くと本
舞うは結果と上うふう善なぢふいと
思ひ居まうそ、

マエゆ 辨仕で米を煮倫ハチを振
じまふ 和の思ふふと大悦候うそ、先づ
とあうして振りてまうそ、とてつくふれまう
づい とらう、昔居居えちナリスとして
居る候ぢう、とまれモメあで飲
いと飲こまう